

「私と絵」

金子 一郎

1997年に60歳で定年を迎え、節目に家内と関西旅行の時、神戸のある小さなギャラリーで油彩画の個展にであいました。中に入ってみると、そこはアマチュア老画家の30周年記念の個展でした。その方は55歳の定年時から絵を始めて30年になるとのこと、若くお元気でした。展示された絵の数々は、皆プロを思わせる作品に感動しました。幸い御本人が居られて、いろいろとお話を伺うことができ、思わず感銘し、「やればできる！」という、勇気をもらいました。この方との出会いで、私が絵を描くきっかけとなりました。最初は八王子市の「初歩の水彩画教室」で1年間学び、翌年同市主催の「初めての油絵」教室を手始めに、同好会の仲間達と6年間油絵を習いました。しかし絵の方はなかなか上手にならず壁にぶつかってしまい、一時はもう絵をやめようかとも思いました。そんな時偶然、市内のアマチュア教室の展示会に出会い、会の画風が、自分が思っていた画風と一致し、早速入会しました。今思えば、私が求めていた油彩画の先生に出会えた事に、感謝しています。先生は過去に独自で築いてこられた貴重な資料を、惜しげもなく出され、絵の具の扱い方から、最低限知っていなければならない基本的な技術・技法まで教えて下さり、私は一皮むけた画風に変身する事ができました。そのときは正に「目からウロコ」の心境でした。絵を描くには「観る」訓練が必要な事、「見える」から描ける、それには「眼力」を高める努力が必要な事を知りました。絵は構図をしっかり決めて、「いいな—この風景、このモチーフ」と思った時や、気持が動いた時にタイミング良く描くようにしています。若い頃から写真の趣味がありましたので、多少映像に対する感性があったのかもしれません。写真はファインダーで見た被写体を正直に再現します。しかし絵は写生時の風景に電柱や、邪魔な物体があればカット出来ますし、また山を高くしたり、低くしたり、木を入れたり、花を咲かせたり、位置や色を変えたりもします。このようにあまり固定観念に縛られる事なく、創造力を発揮できます。そして努めて「理性を捨て、心で描く」を指標にしています。最後に、僥越ながら私のつたない経験から、絵は楽しみながら、夢を持って、描くのが一番です。その為にはやはりある程度の基礎を勉強する事と、出来れば自分にあった、有能な絵の先生を探す事だと思います。また「視覚による表現」を磨く為に出来るだけ、沢山の絵を描く事につきます。そして絵の展示会や、美術館、画廊、書籍等で、多くの絵を観ることの必要性も感じました。絵って本当にステキですね。絵を描く、色を創るプロセスは、創造の域を広げ、クリエイティブ脳を鍛えることにつながります。それが、「やればできる！」の意識を引き出して、ますます絵を描くことが楽しくなりますよ。これからも皆さんにご批評、ご指導を頂きながら、心にしみる絵を一枚でも多く描けるように、日々努力したいと思っています。